

「東アジアジュニアワークショップ参加報告書」

京都大学文学部4年 シ・チュンポー

私の専修は国語学国文学ですが、大学に通っている中で、人間の態度や行動とか、社会の各現象がどのように説明され得るのか、などに対して興味がわいてきて、社会学に関する授業に出たり文献などを自分の母語の英語で読み始めました。教授が学生に教えるという一方的な学習は日本の大学の学習風潮と言っても過言ではないのですが、そういう形式を超越した学習環境に浸りたくて東アジアジュニアワークショップに参加しようと思いました。実際、国立台湾大学・ソウル大学・京都大学の3大学の学生同士が独自の見解を共有したり、フィールドトリップを通じて教室外の「勉強」もできてよかったですと思います。私は日本に留学しているシンガポールの華僑という特殊な立場にあるので、日本のことのみならず、シンガポールや華僑のこともいろいろ質問されて、自分の中にあるさまざまなアイデンティティを見直す機会になったと思います。

社会学の授業に参加するもうひとつの理由は、日本人の学生（京大生）が「国際化」に関してどのように見ているのか、日本人としてのアイデンティティや対外意識などを知りたかったことです。なぜ日本人の学生たちが海外留学とかに積極的に参加していないのか、または「日本人の若者は内向きだ」といった見方がなぜ形成されたのか、などが気になったからです。これを発表のテーマにすることで、今回のワークショップと、その発表までのリサーチと先生からいただいたご指導のおかげで、「国際化」についていろいろ学べました。実際台湾に行って、ある意味「部外者」として現地の学生と京大側の学生との交流を観察したり、自分の通訳能力も試されて、本当に多角的な「勉強」ができたと思います。

今年のジュニアワークショップでは、京大側の学生の4人の中で日本人の参加者が2人しかいなかったのが、京大側の代表者はまさにマイノリティでした。ホスト校の国立台湾大学の学生たちは、おそらく日本の植民地支配を中心に形作られてきた歴史観を持っているにもかかわらず、かなり客観的にガイドしてくれたと思います。とりわけワークショップの実施期間はちょうど今年戦後70周年の光復記念日の前後に当たるので、日本代表のわれわれは東アジアの政治状況などを説明するというチャレンジを与えられ、違う次元での英会話の練習になれたと思います。台湾側だけでなく、韓国側や日本側の学生や教員たちもお互いに理解しようとし、より平和的な東アジアの未来を築きたいという姿勢を感じました。また、真なる「国際化」に対する理解を深めるために、「日本人」・「韓国人」・「台湾人」といったカテゴリーは決して単一のものではなく、一人一人の人が多様なアイデンティティを同時に持っていることを認めなければならないと実感しました。

2日間の発表会だけでなく、その前の3日間のフィールドトリップでも非常に有意義な時間を過ごすことができました。フィールドトリップでは、都市化と急速な経済発展を背景にして、政府が想像していた理想と現実とのギャップを示した社会的現象を体験しました。ホームレス問題や、公娼たちによる反対運動や、オタク文化と移民文化による妙な時空の共用（社会的疎外）など、あたかも目の当たりに政策の失敗が立体化していたようでした。台湾が抱えている社会的諸問題は日本社会のと共通する点が多いからこそ、大学の専攻が社会学でなくてもすぐ共感できる一週間でした。この派遣を通して、発表会にも何度も耳にした「多文化共生」・「国際化」・「ステレオタイプ」などの言葉の意味を改めて考える絶好の機会となりました。

以上述べたように、日本人の学生はもちろん、留学生もこのプログラムに参加する理由が十分あると思います。日本社会がどんどん国際化していく中で、留学生がこの国際化の波の上にとどのように自らの船を操縦すればいいかを考えるいいチャンスでしょう。「海外」から「海外」に行くのですから、国境を越えた何かが入り込んだり貢献したりすることができるのではないかと思います。